銀河英雄伝説　ある女性士官の物語

camiiyu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河英雄伝説　ある女性士官の物語

【Ｎコード】

Ｎ２４０３ＢＡ

【作者名】

ｃａｍｉｉｙｕ

【あらすじ】

この物語はマリス・カイザーという女性下士官の目を通したエーリッヒ・ヴァレンシュタイン提督の物語です

（前書き）

この作品はａｚｕｒａｉｉｒｕ先生のご許可を受けて作成おります
この小説は「らいとすたっふルール２００４」にしたがって作成されています

銀河英雄伝説　ある女性士官の物語

「私の名前はマリス・カイザー２３歳　帝国軍軍曹　所属　兵站統括部第三局第一課」

帝国歴４８１年

マリス・カイザー
「今日私が奉職している兵站統括部第三局第一課に一人の男性というにはあまりにも幼い少年のような男性士官が配属してきました彼の名前はエーリッヒ・ヴァレンシュタインという新前の少尉さんです」

エーリッヒ・ヴァレンシュタイン少尉
「本日兵站統括部第三局第一課に配属してきました、エーリッヒ・ヴァレンシュタイン少尉であります
皆様の足を引っ張ることがないようにいたしたいのでどうかよろしくお願いいたします」

マリス・カイザー軍曹
「少年のような初々しい彼に同僚お姉さんたちは好意的に受け入れられましたが
私には初々しいとは感じられず何か悲壮感を漂わせた目をした男性だと思いましたが
その時の私には彼に起こったある事件の関係者だとは思いませんで

した

配属されて一か月ヴァレンシュタイン少尉も慣れてきたようです、
少尉に聞きました
なぜこの兵站統括部第三局第一課を希望したのかを
少尉が言うには自分は体が弱く前線にはとてもではないがついていい
くことができないなら
後方で帝国を支えたいと、それに帝国文官試験に合格しているので、
退役しても
官僚としてやっていけるんじゃないかと微笑んで私に答えてくれまし
た

でも、その時の私はそれが本心ではないと感じましたが、声には出
さずに聞き流していました」

帝国歴４８２年

マリス・カイザー軍曹
「兵站課に昇進と昇給の季節は来ました、少尉は順当に中尉に昇進
し、私たち兵站課の女性下士官は
昇進はない代わりに昇給がありました、私自身あまり昇給や昇進に
興味はありません
いつも同僚に言われます
ネリスは変わってるわねと、普通なら昇進や昇給したらうれしいは
ずなのに
あなたはちっとも嬉しそうじゃないと、
そうなのでしょうか？実家の家訓にたとえ地位や名誉があってもお
ごることなかれ、謙虚であれと
子供のころから叩き込まれているのでそれが当たり前なんだ今も思
っていますと、少尉いえ中尉に話すと

静かなほほえみでマリス軍曹の言うとおりですねと、答えてくれました」

マリス・カイザー軍曹
「４８２年は大きな出兵なく小さな小競り合いぐらいで特に私たちの課はいつも通りの仕事ばかりをこなして
何事も起らず良かったと思いました、ただ中尉が風邪気味で出勤して同僚においかえされたぐらいです
中尉！風邪を引いているならお家で休んでくださいと、中尉の仕事は私たちでこなせますからと
中尉のファンクラブの同僚が言ってのけました、中尉は困ったように苦笑しながら課長室に行き
ディーケン少将に今日は休みますと報告して帰っていきました、ディーケン少将も同僚たちの権幕の
恐れをなしたのでしぶしぶ許可したようです、こういう時女性は怖いですねと少将は私にぼそっと漏らしました
私もその女性なんですけどというと困った顔をして、君は女性なのになぜか話がしやすいとおっしゃいました
いったい私はなんだと憤慨しましたがもともと冷めたところがあるのですぐに収まってしまいました
自分でも困った性格だと思います」

帝国歴４８３年

マリス・カイザー軍曹
「第五次イゼルローン要塞攻防戦が始まりました、私たち兵站課も昼夜問わず忙しく
、物資の搬入や機材の搬入
修理予定の艦船の対応におわれていました、同僚が言うのに休みが

休みじゃない、
休んでもやすんだ気がしないとこぼしてます、
前線にいる兵隊さんはもっと過酷なはずだと後方にいる私たちはまだましだと同僚をなだめていました
ある日中尉は少将に呼ばれていきました、何事かと思いましたが私たち下士官には
関係ない話だと思い気にも
止めていませんでした、しかし、ことは重大で兵站課から前線に物資補給と視察を兼ねて中尉が
派遣されることが決まった
と朝の訓示でディーケン少将から報告がありました、命令では仕方がないと中尉はイゼルローン要塞に
旅立ちました
中尉がイゼルローン要塞に行って数日が経ちました、同僚たちは中尉の心配ばかりしていました、
けがしてないだろうかとか
病気になってないだろうかとか、あなたたちは中尉のお母さんかとひそかに苦笑していました
私もそれなりには心配していましたが
此ればかりはどうすることもできないなとひそかに思っていました、
このときはまだ、
ただの上司と部下の関係でしかなかったから

しばらくして中尉が帰ってきました同僚たちは、中尉の帰還を喜んでいました
中尉お怪我しませんでしたかとか病気にはならなかったのかと聞き
中尉は何事もなかったと
彼女たちに言っていました」

エーリッヒ・ヴァレンシュタイン中尉

「心配かけてすみません、私はこの通り元気で帰還してきましたと
照れていました」

マリス・カイザー軍曹
「私は知っていました、中尉が前線で倒れそうになったことを知り
合いの士官に聞かされました、
それはひどい有様で、中尉は
血の匂いに充てられて何度もはいて倒れそうになったと、聞いたと
き私は知りました、私は中尉のことをひどく心配していたことに
驚いていました、そして好きなんだと確信しました、でも相手は士
官、上司、私は部下、ただの軍曹とても告白などできるはずはないと
思いましたそして、この思いは誰にも漏らさないことをオーディー
ンに誓いました 、
普通の部下でいようと
イゼルローンでの報告のため中尉は課長室に行きました、そしてそ
こから人事局に連れていかれました
少将がおっしゃるにはイゼルローンで中尉はすごい功績を立てたと
そして昇進するだろうと
しばらくして中尉は大尉に昇進しこの兵站統括部第三局第一課を出
ていくことが決まりました、そこで兵站課にいる
女性士官、下士官によるお別れパーティーを開くことが決まりまし
た、もちろん私も参加しました、
最後のおわかれになると
思ったので、いつもの私じゃない私になって、積極的に大尉に接近
していました
大尉お体を大切にしてくださいね、マリス・カイザーは大尉のご活
躍を陰ながら応援しています、
マリスは・・・・・いえ
何でもありません、もう何も言えなくなってました、すると大尉が
優しく抱きしめてくださいました、私はもうこれで十分です

ありがとうございましたと大尉に小さい声で答えました、わかってくれていたようです、もう諦められるこれで私は本望です

私一人そっとそのままパーティー会場から抜け出して、自分の官舎に戻り、大声を上げて泣いて泣いて
その夜を過ごしました
それから数日私は、無理やり休みを取り、何もぜずまんじりとした日々を送りました

数日後怒られるかなと思いながら仕事場に出勤しました、同僚からは先日のパーティーのこと
根掘り葉掘り聞かれましたが
ただ気分が悪くなり大尉に介抱してもらっただけと答え、風邪を引いたと嘘をついていました、少将にも同じことを言いましたが
見破られていたようで「大変な思いをしたようだね君が元気でいることが大尉には一番のようだよと」
慰めてくれました
そしてこれからは気を引き締めて軍務に励んでほしいと激励してくださいました、
やはり少将だけのことはあると見直す私でした」

私が休んでいる間に大尉は兵站課を去ってきました、
さよならは言えなかったけどこれでいいと自分に言い聞かせて軍務に精励していきました
それからの大尉はいろいろな任務に就いては功績をあげ順当に昇進していきました」

エーリッヒ・ヴァレンシュタイン大尉
＜カイザーリンク艦隊によるサイオキシン麻薬事件　憲兵隊を使っての大捕り物＞

マリス・カイザー軍曹
「私は胸の奥がスカッとなった気分でした
部下にあのヴァレンシュタイン大尉がこの兵站統括部第三局第一課
の在籍していたことを
誇りに思うようにと
大尉は事件の功績を認められて少佐に昇進、私は軍曹のままそれで
いいと思いました

同僚は次々バージンロードを歩いていき、私は兵站課の古参下士官に

少佐は第３５９遊撃部隊の作戦参謀に推挙されまたオーディンを旅
立っていきました、
私は彼が昇進していくことが
うれしくてたまりませんでした、裏の顔では、表の顔は怖いお局下
士官としてふるまっています

アルレスハイム星域の会戦では大活躍、自分のことのように喜ぶ私」

帝国歴４８３年

マリス・カイザー軍曹
「少佐は中佐に昇進、私はそのまま昇給のみ、でも悲しいとは思い
ませんでした」

帝国歴４８４年

マリス・カイザー軍曹
「中佐は巡航艦ツェルプスト艦長兼第１巡察部隊司令に着任、密輸
に関する功績をあげた、

もう私は声も出せないくらいです」
密輸の功績により大佐に昇進、彼が昇進していくことが私の秘かな楽しみ」

帝国歴４８５年

マリス・カイザー軍曹
「第２８５遊撃部隊通称グリンメルスハウゼン艦隊参謀長に就任、もう雲の上の男性です
ヴァンフリート星域の会戦、そしてヴァンフリート４＝２の死闘そして同盟軍の女性捕虜ヴァレリー・リン・フィッツシモンズ中尉
彼は女性には優しいんですと叫びたい、たぶん副官あたりに就任させるんじゃないだろうか、
少しうらやましい気分です彼女が

ヴァンフリート４＝２でヘルマン・フォン・リューネブルク少将とお知り合いになったようです
ヴァンフリート星域の会戦、そしてヴァンフリート４＝２のでの戦闘の功績で大佐から少将に昇進
しかしそれを断り准将にそして
ジークフリード・キルヒアイスに功をゆずる、さすが私の准将と私は心の中で誇る」

ラインハルト・フォン・ミューゼル、ジークフリード・キルヒアイスだれ？
部下の女の子が騒いでいますが、一向に興味がないので
部下の女の子の中には入っていきません、私には彼以外興味がないから

予想通りヴァレリー・リン・フィッツシモンズ中尉が副官になりま

した、
私は悔しいと本当に思いました、彼女に嫉妬しています
彼女と知り合うのは、そう彼が兵站統括部第三局第一課課長補佐を
拝命するときまで

第六次イゼルローン要塞攻防戦が始まりました、ラインハルト・フォン・ミューゼルが
慢心して反乱軍に挟撃され危うく壊滅状態になるところ、
、彼が指令して三人の提督ルックナー、リンテレン、ルーディッゲ
さんが救ったそうです、
さすがは彼だと思いました
味方の危機を察し救援艦隊を送るなんて慢心してるラインハルト・
フォン・ミューゼルなんかには
まねできないでしょうねいい気味です

イゼルローンでリューネブルク少将に喧嘩を売った同盟軍の馬鹿が
いたそうですが、
彼の機転をでリューネブルク少将は救われたようです
リューネブルク少将は恩義を感じていたそうです、皮肉屋さんのリ
ューネブルク少将は
借りはいつか返すと彼にいってたようです
リューネブルク少将に少し友情みたいなものは芽生えましただって
彼が認めた方ですから

要塞攻防戦で彼が発熱して司令部の椅子に座ってると聞いたとき、
私は介抱してあげたいと真剣に思いました、私が要塞にいたらと
後方勤務の私には無理な話でした、フィッツシモンズ中尉がなにこ
れとなくしてくれていたそうです、
この時ばかりは彼女に感謝しました
第六次イゼルローン要塞攻防戦。帝国軍、同盟軍に圧勝する。正義

は必ず勝つだって私の彼がいるから」

帝国歴４８６年

マリス・カイザー軍曹

「准将、第六次イゼルローン要塞攻防戦に多大な功績をあげ　少将に昇進それに伴い

兵站統括部第三局第一課課長補佐就任」

彼が戻ってくる、私たちの職場にもううれしくてうれしくて天にも昇る気分で

少将、無事の帰還、兵站課一同心よりお祝い申し上げます、そしてここでのお仕事がんばってください

マリス軍曹のお祈りのおかげで、私は無事帰還できました、ありがとうございます

少将直々にお言葉をいただきました、もう何もいらないと、この言葉聞けただけで十分です

ですが仕事とプライベートは分けているのでうれしいのを隠して勤務に精励しました

少将の帰還を祝ってまたパーティーを開きました、華やかなパーティーも終わり、

しこたま飲んでいい気分で宿舎に帰る途中

フィッツシモンズ中尉に出会っちゃいました、急に酔いがさめる思いでした、

フィッツシモンズ中尉には何の恨みもありましたから、中尉に喧嘩を吹っ掛けました

あなたがいなければ副官の地位は私だったかもしれないのに、あな

たがいなければと、
相当からんでいたようです
帝国淑女としてはあり得ない罵詈雑言を中尉に浴びせていたようです、
もうこうなったらどうにも止まりません、お互いにいいたいこといいあい
とっくみ合いのけんかです、私だって好きで捕虜なんかなったりしないわ、まして副官なんか、
もう同盟には帰れないんだから
それを聞いたとき私は正気に戻りました、中尉は泣き出していました、
私も泣き出しそしてごめんなさいと彼女に謝りました」

私と中尉が喧嘩してると聞きつけた少将は、もう同じ帝国軍なんだから喧嘩などしないようにと
優しく私たちを諭して御自分の宿舎へ帰っていきました
私たちも帰りましょうと言って歩き出しました、中尉をわたしの宿舎に招き、お互いに悪かったと謝り、これからは同じ方の下でお仕えする意味で私の秘蔵の高級ワインで
固めの杯を交わし親友の契りを交わしました
ヴァレリーにお願いして危険なことは絶対にさせないで、絶対に彼を守って、
私にはできないことだからとヴァレリーはこころよく引き受けてくれました、」

ヴァレリー・リン・フィッツシモンズ
「マリスは少将に気持ち打ち明けたの？」

マリス・カイザー
「いいえ、打ち明けてない、だって身分違いなんだから、彼のおじ

い様はリメス男爵です
、私はただの平民それも両親もいないし、
かなうわけないじゃないと貴族と平民の身分差は超えられないまして帝国じゃ」
ヴァレリーは何も言わず抱きしめてくれました、私はただ泣くだけしかできませんでした」

ヴァレリー・リン・フィッツシモンズ
「もう何も言わないわマリス、でもなぜ少将が男爵の係累だと知ったの」

マリス・カイザー
「実は彼のご両親コンラートヴァレンシュタイン弁護士のお父様と私のおじい様が古い友人で
子供のころからヴァレンシュタイン弁護士知っていたし父とヴァレンシュタイン弁護士もまた親友関係で手紙を父に託していたんだと思う最後に会った日；
面倒事に巻き込まれたからもしかしたらと父に証拠の品のコピーを託して亡くなったの、いえ殺されたのでしょうねヴァレンシュタイン弁護士は　でも
父もまた同じように殺された可能性が・・・・・・・でも殺された証拠はないの、突然の交通事故に巻き込まれて・・・・・・幼い私を残し・・
そんなことがあったのねマリス、証拠の品は持ち出されていたことが私の命を救ったから、
私は今ここにいるんだけど、私なりに調べられる範囲でわかったのはつい先日のことなのだから、
ヴァレリーお願い私のことは少将にはエーリッヒには黙っておいて、

このことで彼に負い目をかけさせたくはないの、お願いお願いヴァレリー・・・・・・・・・・・」
ヴァレリー・リン・フィッツシモンズ
「わかったわ、マリス言わないわといったけどやはり、
私の胸にはおさめられない、少将にご相談しましょう、ごめんねマリス」

エーリッヒ・ヴァレンシュタイン少将　ヴァレリー・リン・フィッツシモンズ中尉
「深夜私の宿舎にフィッツシモンズ中尉が訪ねてきました
実は少将にお話しというかご相談に参りました
マリスカイザーのことですね、私が知らないと思っていたのですか？彼女のご両親のことは
父から聞かされていましたよ
あいつはいいやつだ心から信頼できるただ一人の男だ
それを言ったところで彼女のご両親が生き返りますか、私の両親のために亡くなったと、
言えません言えるわけではないのです」

「じゃぁどうするつもりなのですか」

「彼女が口止めしてるんでしょう」

「なら、私も何も言うことはありません、今まで通りの上司と部下の関係に徹するつもりです」

「いいのですか少将、本当に」

「ええお互いのためなんです、それでいいのです」

「マリスが少将のことを好きだとしても」

「あなたの胸に秘めておいてあげてください、すべて」

「いいですね、ヴァレリー・リン・フィッツシモンズ中尉」

「了解しました、エーリッヒ・ヴァレンシュタイン少将」

「送りましょうか中尉」

「自分で帰れますわ、少将」

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

帝国歴４８６年

宇宙艦隊司令部

＜宇宙艦隊司令長官ミュッケンベルガー帝国元帥同盟軍に向けて進発しました＞

マリス・カイザー軍曹

「いつものごとく戦争が始まると兵站課は戦場になる、物資、修理、燃料の補充等、

いつもは書類が飛び回る戦場が、彼がいるだけで、静かな戦場

静かな修羅場、女性なら自分の無様な姿だけは彼には見せない見せたくない、女なんていつの時代も同じ

暫くはそんな喧噪の日々を送っていた私たち兵站課と彼の副官で
私の親友ヴァレリー・リン・フィッツシモンズ中尉ともに

その日は朝から何か胸騒ぎがする日でした、彼に何か起こらなけれ
ばいいと祈る

彼が宮廷に呼びつけられた、何かあったのかとみんなで話していた」

ノイエ・サン・スーシ
<内乱発生、各所警備十分に警備せよ　皇帝皇帝不予フリードリヒ
四世が倒れた>

エーリッヒ・ヴァレンシュタイン少将
「反乱兵がリッテンハイム侯屋敷に立てこもっている、各人注意し
て警戒を怠らないように」

マリス・カイザー軍曹
「私は胸騒ぎが収まらない、彼に何かあったら生きていけない、そ
う思ったらと警備を振り切って
リッテンハイム侯屋敷に飛び込んだ
彼がどこにいるか警備兵に聞いて急いで走り出した反乱兵が彼をラ
イフルで狙っているのが見えた
夢中で私は彼の前に飛び出した　ヴァレリーがかばう前に」

ヴァレリー・リン・フィッツシモンズ中尉
「マリス〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜とヴァレリーが
叫んだ」

マリス・カイザー軍曹
「しょ～うしょ～う　エーリ～～～～～ッヒ
私は夢中でエーリッヒ前に立って彼をかばった」
「ライフルの光線は私の心臓を貫いた　・・・・私は静かに倒れた
エーリッヒの胸に・・・・・
よかったまもれ・・・・・・て・・・・・・・」

エーリッヒ・ヴァレンシュタイン少将
「マリス軍曹しっかりしろ、マリス、マリスしっかりしろ～～衛生兵　衛生兵～～～～」

マリス・カイザー
「私はエーリッヒの胸に抱かれながら静かにヴァルハラに旅立った、
彼を守れたことを誇りに思い、
両親が待つヴァルハラへ」

彼女の歴史のページは閉じられた

マリス・カイザー帝国少尉　享年２８歳

反乱兵からエーリッヒ・ヴァレンシュタイン少将を身をもって守り殉職
のちに皇帝フリードリヒ四世より感謝状とともに異例の三階級特進
帝国騎士の称号を授けられる

エーリッヒ・ヴァレンシュタイン少将

このたびの反乱鎮圧の功により帝国中将に昇進

こののち彼がマリスカイザーのことを語ったことはない

親友ヴァレリー・リン・フィッツシモンズもまた何も語ることはなかった

銀河の歴史がまた1ページ

（後書き）

自分のできる精いっぱいの作品です、
これ以上語ることはありません

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2403ba/

銀河英雄伝説　ある女性士官の物語

2012年1月6日01時48分発行